

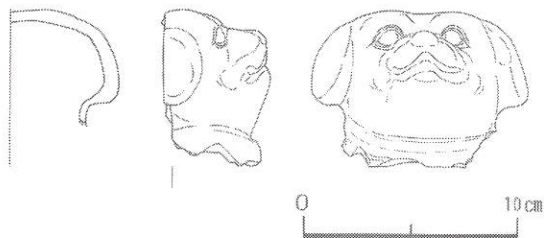
鹿島昌也 小林照子 加藤雄太

(埋蔵文化財センター主査学芸員 東京大学埋蔵文化財調査室 同志社大学学生)

はじめに

平成 18 年度に実施した総曲輪通り南地区（総曲輪フェリオ）再開発事業に先立つ発掘調査の C-2 区から人形（狎）が出土していた。報告書（富山市教育委員会ほか 2006）には出土した土坑 SK09 は 18 世紀～近代以降の遺物も含み新しい遺構とされ、出土遺物は殆ど紹介されていなかった。

今回紹介する人形（狎）（以下、富山城下狎と呼称）は、この土坑から出土したもので、首から上部の顔面～前頭部が残存している。鹿島は近年、富山城下町遺跡やその周辺から出土する土人形の産地について調査を始めており、この富山城下狎の産地を調査する中で判明したことを述べる。



富山城下町遺跡出土「狎」実測図

1 調査の経過と研究史

平成 25 年 9 月、東京大学構内遺跡から出土した人形を実見・検討する機会を得た。その中の御殿下記念地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）から出土した坐狎（報告書第 409 図 2. 以下、東大御殿下坐狎と呼称）について、富山城下狎とよく似ていることに気がつき、同 26 年 7 月に東大御殿下坐狎と富山城下狎を比較検討（注 1）した。前者は伏見人形と推測されている（同 1990）。

人形は早くから郷土玩具として注目され（武井 1930）、伏見人形については、考古学的な視点での研究が進められている（木立 1997、2001）。また近年、加賀藩・富山藩・大聖寺藩・水戸藩の大名屋敷が所在した東京大学構内遺跡から出土した 1 千点を越える人形・玩具類についての分類や年代の変遷の研究も行われている（安芸・小林・堀内 2012、小林 2012）。

さらに加藤より伏見人形の産地である京都市法性寺跡で大量の土型や原型が発掘された（（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011）との情報を得た。同調査において坐狎の土型（報告書図版 28 型 175.以下、伏見坐狎土型と呼称）があることが分かり、平成 26 年 11 月に（公財）京都市埋蔵文化財研究所にて富山城下狎と伏見坐狎土型を比較検討（注 2）した。

2 製品と土型との比較検討結果

(1) 東大御殿下坐狎との比較

富山城下狎は、残存高 8cm、幅 10cm で型起し成型され、内部は中空である。淡黄白色を呈し、表面には雲母粉が観察される。短い鼻梁、垂れた耳、大きく開いた目といった狎の特徴をよく表現している。

一方、東大御殿下坐狎は、高さ 16.5cm、幅 15cm で型起し成型され、内部は中空である。浅黄橙色を呈し、表面には雲母粉が顕著にみられる。

両者を比較すると大きく開いた目や垂れた耳、口など表現方法はほぼ同じであるが、鼻穴が前



左：富山城下町遺跡出土

右：東京大学構内遺跡出土（東京大学埋蔵文化財調査室所蔵）

者は不明瞭なのに対し、後者は2穴が明瞭に表現されている。

しかし、この違いは型起しする際に型の鼻穴部分に粘土がうまく充填されなかった場合、明瞭でなくなる場合があることから、顔面部分のみの比較ではあるが2点は同じあるいは極めて近い原型から起した土型から製作された製品であることが推測される。

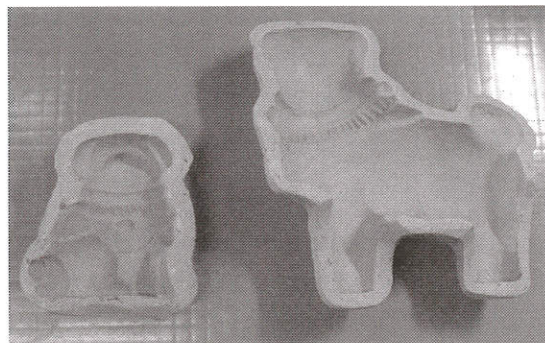
(2)伏見坐狎土型との比較

伏見人形の生産工程は原型（雄型）の製作→焼成→土型（雌型）の製作→焼成→生地（型抜き（型に粘土を詰める）→生地（製品）の乾燥→焼成→胡粉塗り・彩色→完成となる。法性寺跡では、土坑 63 から幕末～明治にかけての陶磁器とともに人形の原型や土型、製品、道具類が多数出土した。あわせて人形を焼成した桶窯と呼ばれる焼成窯も見つかっている（（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011）。

伏見坐狎土型（型 175）は型高 12cm、型幅 10.5cm を測る中型を呈する土型である。全高が残る東大御殿下坐狎と比較すると一回り小さい製品用の土型と分かる。しかし目や鼻、口の表現方法が良く似ている。法性寺跡出土の土型には、型高 6.8cm、型幅 6.0cm とさらに一回り小さい小型の坐狎（型 179）や型高 20.5cm を測る大型の立狎（型 173）などもある（（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011）。このことから土型には大型・中型・小型といった様々なサイズがあることが分かる。東大御殿下坐狎や富山城下狎はいずれも大型のサイズに該当する。

3 産地について

産地については、胎土から判断する他に生産地に残る原型や土型、調査で出土した製品資料から確認する方法がある。ここでは、富山城下狎が京都産であるか検討する。胎土について、京都で出土する土人形の土色は淡黄白色を主体とし、富山城下狎も同色を呈する。また先ほど比較検討した伏見坐狎土型に加え、奥村寛純氏による資料集成（奥村 1976）が参考になる。奥村氏の資料集成の中には京都伏見人形老舗の丹嘉収蔵の土人形の原型が集成されており、狎の原型が多く確認できる。ここには高さ 39cm～30cm の特大型の原型もあるが、高さ 20cm のものもあり、東大御殿下坐狎や富山城下狎に近いタイプの原型も確認できる。さらに狎の表現が極めて似ていることも指摘できる。よって、富山城下町狎は京都伏見一帯で生産された資料の可能性が極めて高いということが出来る。



法性寺跡（左：型 175、右：型 173）

（（公財）京都市埋蔵文化財研究所蔵）



左：法性寺跡（型 175）から起こした狎
右：富山城下町遺跡出土狎



『広益国産考』にみる伏見人形の製作工程（彩色仕上）

真中に彩色された狎が3体みえる

（奥村 1976 より）

4 大型狽の出土類例について

富山城下狽は城下町の武家地に掘られた土坑（ゴミ穴）に廃棄された状態で出土した。時期は 18 世紀以降の遺物が出土している。東大御殿下坐狽は御殿下グラウンド表土除去後の最上層の整地面（IX期）で確認された 49 号遺構と呼ばれる井戸跡から出土した。時期は、下限を 1860 年代とし、上限は梅之御殿（注3）に後続する時期と捉えられている。加賀藩江戸上屋敷の御殿空間の一角である。これら狽の類例として、東京都港区「讃岐高松藩・陸奥守山藩下屋敷」から 1 点出土している。18 世紀末～19 世紀初頭の高松藩下屋敷時代の 455 号地下室から見つかった（注4）。これは、胎土が赤褐色を呈し、江戸在地で製作された。これまで、大型の狽の出土例は非常に少なく町人地からの出土例は今のところ知られていない。



富山城下町出土（総曲輪四丁目・旅籠町地区出土燈籠（残存高 16.5cm）、隨身（残存高 10cm）、狐、獅子（注7））

5 富山城下狽出土の意義について

伏見人形は、伏見稻荷神社の参詣客を対象に製作し販売された。人形は、参詣客の土産物として各地にもたらされた。

東大構内遺跡では、19 世紀に入ると土人形の出土数は爆発的に増加し、江戸在地系の人形の中に京都系の人形と同じ意匠のものが現れる。このことは伏見人形のブランド化が進んだことにより、各地で模倣品が作られていったためではないかと考えられる（小林 2012）。

富山城下町狽や東大御殿下坐狽は京都伏見産とみられる製品を直接入手している。小さい狽は、子供のひきつけや鼻づまり防止、安産のまじない用とされ神棚や床間などに祀られていた。富山城下町遺跡出土品には、一番町共同ビル地区で狽抱き人形が 1 点ある。子供を対象として流通した安価な玩具用であり、子供が健康に育つためのお守りの意味があったのではと推測されている（基峰 2014）。その一方で、大型の製品は観賞品としての要素が強く、比較的高価な製品だったと考えられる。

富山城下町遺跡では、総曲輪四丁目・旅籠町マンション地区からも多数の土人形が出土した（富山市教育委員会ほか 2010）。その中にも、大型品とみられる製品（写真）で、天神あるいは隨身、燈籠などがあり、天神信仰との関連が推測される。この隨身や燈籠は、胎土などから産地は伏見や江戸ではなく、在地産とみられる（注5）。また、富山城下狽が出土した同地区の土坑からは天神板絵の部分が出土した。富山藩の上級藩士戸田式部屋敷邸宅のゴミ穴から出土した板戸で武家における天神信仰の普及を物語っている。

富山では、弘化 3（1846）年以降土天神と呼ばれる土製天神人形が流行し、武家や大商家などの上流階級に好まれた（富山市教育委員会ほか 2006）。さらに、嘉永年間（1848～54）には富山藩十代藩主前田利保が名古屋の陶工加藤家の陶器職であった広瀬秀信を富山に呼び、千歳御殿にて千歳焼を製作し、その子安次郎が天神臥牛を焼いて献上したのに始まるとされる富山土人形が作られる。江戸幕末以降、発展して民間信仰や縁起物、子供の玩具として数多く製作された。そのようなことから富山土人形は瀬戸の系統であるとの説がある（注6）。

しかし、その実態は出土品から推察すると単純ではなさそうである。藩主利保は陶磁産業の開発による藩財政の充実に力を注いでおり、土人形の他に越中丸山焼を準藩窯と位置づけ援助している。越中丸山焼は、文政 12（1829）年～明治 27 年に婦負郡丸山村の甚左衛門が京都で陶法を学び郷里に帰って創業した。越中丸山焼には、京焼や再興九谷の影響を受けた

と見られる製品も多く製作されている。江戸生まれの藩主は、参勤交代で江戸と国元を行き来する中、江戸城下の武家社会で流行する伏見や江戸の土人形を目にしていただろう。その文化を国元の産業振興に導入する際に、既に富山城下の武家の間でも浸透していた京都伏見産人形の影響も見過ごすことは出来なかっただろう。

おわりに

近年、富山市中心市街地再開発に伴い、富山城や城下町の発掘調査が急増している。今後、人形出土例の増加が見込まれる。それらを江戸富山藩邸や金沢城・城下町で出土する人形などとの比較検討を行い、武家の流行や天神信仰、民間信仰などにも触れながら富山土人形の起源にも迫ることが出来ればと考えている。

注

- (1) 東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹氏、安芸毬子氏、小林照子氏に実見のご配慮をいただいた。
- (2) (公財)京都市埋蔵文化財研究所の大立目一氏、上村和直氏に実見のご配慮をいただいた。この場に加藤も立会い富山城下狘を観察した。この時、能芝勉氏からもご意見をいただいた。
- (3) 享和2(1802)年加賀藩12代藩主前田斉広の時に10代藩主重教の正室寿光院のために建てられた居館。廃絶時期は不明であるが、文政8(1825)年をやや遡る時期とみられている。
- (4) 小林照子氏による。
- (5) これまでに富山城下町遺跡から出土した土人形を安芸毬子氏や小林照子氏に実見していただいたところ、赤橙色の江戸産は1点も見られなかった。一方で淡黄白色～黄橙色を呈する製品が多く、淡黄白色のものは京都系、それ以外は在地系ではないかとの指摘があった。
- (6) 高島賢一は、三村与三氏の「広瀬家聞き書」記録からの要約として「名古屋の田圃屋亀助と云う有名な人形作りがいた。何らかの事情で亀助が広瀬家にひきとられ広瀬家に人形製作技術を伝えたと云う」と広瀬家に伝わる話を紹介している(高島 1998)。「田圃屋亀助」は実在した人物か不明である。
- (7) 写真の狐・獅子は報告書(富山市教育委員会ほか 2010)掲載、燈籠・隨身は未掲載品。

文献

- 安芸毬子 1990 「土人形について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊 考察編 東京大学埋蔵文化財調査室
- 安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報 8 2009・2010 年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 奥村寛純 1976 『伏見人形の原型』伏偶社・丹嘉
- 木立雅朗 1997 「伏見人形の窯をめぐって―近世京都の窯業についての予察」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会
- 木立雅朗 2001 「伏見人形の成立と発展をめぐる二つの背景―近世窯業の発展と精神文化」『立命館大学考古学論集』II 立命館大学考古学論集刊行会
- 基峰修 2014 「背割水路出土の土人形」『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 小林照子 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について」『東京大学構内遺跡調査研究年報 8 2009・2010 年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 高島賢一 1998 「富山の土偶様(富山土人形)」『郷玩文化』No.128
- 定塚武敏 1974 『越中の焼きもの』富山文庫 2 巧玄出版
- 武井武雄 1930 『日本郷土玩具』東の部・西の部 地平社書房
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011 『法性寺跡』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『山上会館・御殿下記念館地点』第二分冊
- 富山市教育委員会 総曲輪通り南地区市街地再開発組合 2006 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 総曲輪四丁目・旅籠町地区開発協議会 2010 『富山城跡発掘調査報告書』